ひろげよう！

サッカーファミリー

次の100年へ

誰一人取り残さない世界を

障がいのある仲間とともに

公益財団法人 日本サッカー協会

はじめに

サッカーを愛する私達にとって、サッカー、スポーツを共に楽しむ仲間が増えることは喜びです。

それがさらに増え、広がっていくように、より楽しめるように、より楽しみやすくなることは、「JFA2005年宣言」にうたわれている、JFAの理念、ビジョン、約束とも通ずるものです。

サッカーは世界のスポーツ。言葉が通じなくても、ボール一つあればみんなが楽しめるスポーツであると言われます。誰もがすぐに一緒に楽しめるのがサッカーの良いところ。みんな楽しむという「当たり前」をもっと広げ、伝えていきたい。関わり、出会いを増やしたい、広げたい。

それは、障がいがある人も同様です。様々な種類の障がいがあっても、サッカーはちゃんとある。サッカー、スポーツをあきらめる必要などありません。

もっと身近で、自分に合った選択肢でサッカーがやれると良い。だから、もっと身近で、楽しめる場が増えると良い。サッカーを「する」のはもちろんのこと、「みる」こと、「支える」ことにも、もっと積極的に関わりたい。

そのためには、それを当たり前にしてくれる仲間がもっともっと必要です。 既にそれを当たり前にしていただいている皆さんもいらっしゃいます。でもその一方で、そう思うけれど、気になっているけれど、踏み出せない、どうしたら良いかわからない、知らなくてわからないから不安、という人もたくさんいらっしゃるかもしれません。そんなことを考えてみたことがなかった、という人もいらっしゃると思います。

そのような皆さんが、一歩踏み出せるように、考え方と事例を示し、具体的に行動してみるためのきっかけをつくりたい、というのがこのハンドブックを作成しようと考える動機です。

気づきときっかけを得て、一歩踏み出す人が増えてくれたら、こんなに嬉しいことはありません。私達が掲げてきたJFAの理念、ビジョン、グラスルーツ宣言、これらは実現するためにこそあります。

サッカーファミリーを増やし、世界を広げていくこと、サッカーの広さ、深さを分かち合うことは、サッカーに関わる私達一人ひとりがしていけること。

日本サッカー協会は、2021年に100周年を迎えます。サッカーファミリー、次の100年に向けて、サッカーをもっと広く深く豊かに、誰にとってももっともっと身近に。

サッカーを通して共生社会の実現を目指しましょう。その力がサッカーにはあります。

ひろげよう！
サッカーファミリー
次の100年へ

CONTENTS

はじめに …… 2
背景として …… 4
趣旨と目的 …… 8
「する」「みる」「支える」…… 10
「する」…… 11
「みる」…… 16
「支える」…… 18
ファミリー …… 20
主な障がいの特性と障がいのある人への配慮 …… 22
障がい者サッカーを楽しむ仲間たち …… 28
00_日本障がい者サッカー連盟
01_アンプティサッカー（切断障がい）
02_CPサッカー（脳性麻痺）
03_ソーシャルフットボール（精神障がい）
04_知的障がい者サッカー
05_電動車椅子サッカー
06_ブラインドサッカー（視覚障がい）
07_デフサッカー（聴覚障がい）
あとがき …… 39

UCDAフォント
みんなの文字®
UDフォントに、科学的基準。
を使用しています。

背景として

障がい者をめぐり、社会的な変化がありました。
それと共に、JFAでもグラスルーツ、そして障がい者サッカーへの取り組みを
あらためて議論し、整理し直しました。

国内法制度改革

平成23(2011)に制定されたスポーツ基本法で「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的に スポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じて必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と初めてスポーツに関する法律に障がい者のことが明記されました。基本法前文で、スポーツは、「国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠」とうたわれています。しかし、障がい者のスポーツ実施率はまだまだ高くありません。受け入れる場や指導者が不足していて、運動する機会になかなか恵まれないことが大きな原因であると考えられます。

国際的な動向として、2006年12月、国連総会において「障害者の権利に関する条約」が採択され、障がい者の権利や尊厳を大切にしながら、社会のあらゆる分野への参加を促進することが合意されました。

日本でもこの条約に締結に向けて、2013年に「障害者差別解消法」が制定されました。「すべての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進すること」を目的としたものです。2014年1月には障害者権利条約を批准しました。

「障がい」に対する捉え方の変化 ～「障がいの社会モデル」

こうした条約や法律が誕生してきた背景には、人々の「障がい」に対する捉え方の変化があります。

従来は、障がい者が困難に直面するのは「その人に障がいがあるから」であり、克服するのはその人（と家族）の責任だとする考え方がありました。「障がいの個人モデル（医療モデル）」と呼ばれる考え方です。それに対して「**障がいの社会モデル**[※1]」と呼ばれる考え方が出てきました。障がい者が日常生活または社会生活において受ける制限は、心身の機能の障がいのみならず、社会における様々な障壁（バリア）と相対することによって生ずるもの、「社会こそが『障がい（障壁）』をつくっており、それを取り除くのは社会の責務」である、という考え方です。この「障がいの社会モデル」の考え方をベースにして、先に紹介した「障害者権利条約」「障害者差別解消法」が制定され、障がいのある人への**合理的配慮**[※2]をする必要性が強調されるとともに、障がいのある人もない人も参加しやすい社会のあり方を考えていこうという動きが生まれてきました。

※1 P21「『障がい』はなかった」をご参照ください。

※2 障がいのある人が、他の人と平等にすべての人権および基本的自由を享有し、または行使することを確保するための必要かつ適当な変更および調整。過度の負担を課さないものをいいます。

障がい者サッカーへの取り組みに向けて

日本サッカー協会では、「グラスルーツ」をより深く捉えるためのディスカッションを行い、子ども達のみならず、「プロ、エリート以外のすべて」と捉え直しました。そしてより積極的に取り組むことを決意し、2014年5月にJFAグラスルーツ宣言を行いました。その前文で、初めて障がいを明記しました。

従来、日本サッカー協会では、組織が不明確だったこと等により、障がい者サッカーとの組織としての向き合いをしてきませんでした。一方で、スポーツ基本法、東京オリンピック・パラリンピックの決定、スポーツ庁ができ障がい者スポーツも含め管轄になったこと等が背景としてあり、グラスルーツ宣言内に明記すると共に、障がい者サッカーに取り組むための検討に入りました。

「Football For All サッカーをもっとみんなのものに」

年齢、性別、障がい、人種等に関わりなく、誰もが、いつでも、どこでも。

私達日本サッカー協会は、サッカー、そしてスポーツの持つすばらしさをもっともっと、たくさんの皆さんと分かち合い、育みたいと考えています。

JFAグラスルーツ宣言

だれでもJoin♪障がい者サッカー

サッカーはみんなのもの。障がいを持つ人も安心してサッカーを楽しめるようになれば、豊かな社会の実現の一助となるでしょう。そのためには、多くの人達が障がいのことを理解し、どうすればみんなが楽しめようになれるかを考え行動することが必要です。「ダイバーシティ＆インクルージョン」の考え方のもと、多様性を受け入れ、障がいのあるなしに関わらず、サッカーやスポーツを通じて、安心して個性が発揮できる場づくりに取り組んでいる団体を認定しています。

http://www.jfa.jp/grass_roots/partner/join/

障がい者サッカー
JFAグラスルーツ推進
賛同パートナー

JFAの取り組み

重点的に取り組む柱を掲げて進めていきます。

1 組 織

❶ 統括団体として、日本障がい者サッカー連盟（JIFF）を設立

❷ 各都道府県に担当を配置、９地域ミーティングにて取り組みを進める

JFAとJIFFが協働で「９地域障がい者サッカー連携会議」を開催し、地域ごとに具体的なディスカッションを進め「連携の活用」と「活動創出の場」となることを目指しています。

©JIFF

2 グラスルーツ

❶ JFAグラスルーツ推進・賛同パートナーの開始

❷ プロモーション

JFA.jpでの情報提供、ハンドブック作成等

❸ 指導者養成を通して

サッカーをやりたい人が日常でサッカーにアクセスできるよう日常の場を増やすために、サッカーファミリーと障がい者サッカーをつなげることを目指し、サッカーの指導の知識、経験、現場、情熱を持つ指導者達に伝えています。

©JFA

- ▶「障がい者サッカー」の指導の基本を理解する
- ▶ サッカー指導の知識・経験を、どのように障がいのある選手に適用できるかを知る
- ▶ 今後の活動において、「障がい者サッカー」に関わりを持つ機会とする
- ▶ サッカー指導の知識・経験および情熱にプラスして、どうしたら「障がい者サッカー」に役立つかを考える

- C、D級指導者養成講習会にて情報提供
- リフレッシュ研修会「障がい者サッカー指導」の開始、Eラーニングも開設
- 障がい者の講習会受講の促進

3 SDGs取り組み

公益財団法人日本サッカー協会（JFA）は、サッカー競技を統括する唯一の団体としての社会的責任をふまえ、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。」という理念のもと、サッカーを通じた様々な社会貢献活動を行っています。JFAは、2009年に国連グローバル・コンパクトへスポーツ統括団体として世界で初めて登録されました。国連サミットで採択された「持続可能な発展のための2030アジェンダ」で表明されている「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に、スポーツを通じて貢献していきたいと考えています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

趣旨と目的

前述のように、取り組みは始まっていますが、まだまだ広がりは足りません。
もっともっとサッカーファミリーの輪を広げ、さらに広げる力になってほしい、
障がいがあってもサッカーをしたいと思った人が、どこに住んでいても
身近でサッカーにアクセスできるようにしていきたいのです。

サッカーファミリーのパワーで

サッカーをもっとみんなのものへ。サッカーファミリーのパワーで、そのネットワークで、大きく広げていきたい。広がっていきたい。
また、障がいのある人がサッカーに出会うきっかけは、口コミによることも多いそうです。日本全体に広がるサッカーファミリーの皆さんに、口コミの情報を伝えるネットワークとして機能していただければ最高です。
サッカーファミリーの皆さん一人ひとりが、考える、伝える、行動することで、サッカーファミリーが広がり豊かになっていく契機となれば幸いです。

もっともっと広がりを

このハンドブックを通じて、広くサッカーファミリーの皆さんに呼びかけ、難しいと感じていることがあればぜひ解決して一歩踏み出していただきたいと考えています。

障がいのある人がサッカーをしたいと思ったときに、どんなことに困っているか、どんな考え方や配慮の工夫で解決できるのか。今まであまり考えることがなかったとしても、そのことを気づき、考えるきっかけになれば。もしも、日頃、気になっているけれど踏み出せないと感じている人には、迷いから一歩出るためのきっかけになれば。そのように考えています。

踏み出し、一人ひとり、一つひとつのケースと向き合って

障がいは、種類も程度も実に様々で、個人によって異なります。ですから、このハンドブックであらゆるケースを網羅することはできません。考え方に触れ、踏み出すきっかけを得たら、あとはぜひ実践の中で、本人とコミュニケーションをとって、一つひとつ深めていただければと思います。私達が皆一人ひとり違うのと同じように、障がいのある人も一人ひとり異なります。だから決めつけず、基本的知識を手がかりにしつつ、本人と確認して本人に合った対応をしていただくことが大切です。

７種類の障がい者サッカーと共に

日本障がい者サッカー連盟には７つの障がい者サッカーの協会／連盟が入っています。また、この種目の分類以外にもサッカーがあります。どのような障がいがあっても、サッカーはあります。シンプルで世界に広がりを持つ、サッカーならではかもしれません。後半に、各種目のプレーヤー・関係者の声を紹介しています。ぜひ、関心を持ち、障がい者サッカーの試合を観てみてください！

特に子ども達の機会を

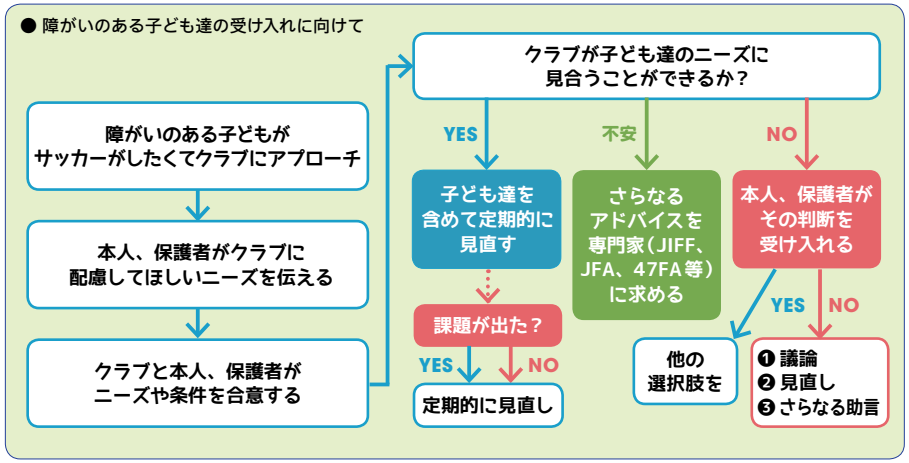
障がいの契機は、先天性、後天性と様々です。子どもの時から、地域の日常で、サッカーとの良い出会い、入口をつくり、できるだけ良い経験を、ということは、健常者と変わりありません。フェスティバルやチームでの活動に、参加しやすい環境ができることを望んでいます。また、既に受け入れていただいている皆さんに、プラスとなる情報をお伝えし、さらに充実させること、続けていくこと、増やしていくことにつながればと考えています。

それぞれの選択肢と目指す先と

国内でも海外でも、健常者と共に高いレベルでプレーする人もたくさんいます。もちろんそういう人もたくさん出て、自分の能力や志向に応じて、様々な選択肢があることが理想と考えています。

一方、子どものうちは一緒にできていても、年齢が上がるにつれて、一緒にやることが難しくなってくる場合もあります。その際には、障がい種別のサッカーがあることを、伝えていただけると幸いです。皆が自分に合った選択肢でサッカーを楽しみ続けられる、関わり続けられることが、グラスルーツ宣言での目標の一つです。

障がいのある人が、もっとサッカーを「する」「みる」「支える」のを楽しむために、私達にできること



サッカーを楽しみたい気持ちは皆一緒！
サッカーをやりたい理由に、
健常者も障がい者も変わりはありません。
だけどプレーできる場がとても少ないです。

サッカーをプレーできる場がとても少なくて困っています。やれる場がなかなかなくて、遠くまで通わなくてはなりません。時々しかありません。身近でもっと頻繁にやりたいのに。一人で公園で練習をしています。でもサッカーは皆とやるから楽しいもの。障がいのある人にもっとサッカーを楽しんでもらうためには、身近にあるクラブで、一緒にやれたら良いのに。

まずは事前に情報を得る

でも障がいのある人は、クラブに入ろうと思っても断られることがあります。クラブ側としては、「前例がない」「わからないから不安」「安全性が心配で責任が持てない」といった気持ちがあるかもしれません。

始めてみるまでは、前例はないもの。ぜひ一例目に踏み出してみてください。

「わからないから不安」、そのお気持ち、よくわかります。今まで接点がなく、なんの情報・知識もない、という方はたくさんいます。知る機会がなかったからわからない。知る機会をつくって、少し情報を得てみてください。障がい者サッカー指導のリフレッシュ研修もあります。

まずは、配慮、特別な支援が必要な場合に、事前に情報を得る方法を確立しておくことが重要です。アプローチの段階で、「なんらかの配慮が必要」ということで加入を断らないでください。

左ページのチャートにしたがって、検討・準備をしてみてください。

重度の障がいで安全の確保が難しい場合ももちろんあります。一つひとつのケースに知るべき専門的な知識が必要となる場合もあるかもしれません。その際には、保護者の方や関係者の方の力を借りて、情報や助言を得ながらやっていただくことをお勧めします。

活動前にしておくべきこと

障がいのある人と共に活動をする場合には、以下の点を事前にご確認ください。

- **参加者の障がいの種別・程度、留意事項**
- **会場周辺の主な救急病院の一覧、土日祝の場合の体制**
- **AEDの設置場所**
- **最低限のメディカルキット**
- **避難・誘導経路の確認**

すべて、どんな活動でもやるべき当たり前のことですね。

する

目の前の相手の特徴、得意、不得意を知り、
力を引き出すことは、そもそも指導の本質。
通常の指導の精神と変わることはありません。
少しの配慮で、可能性が広がります。

目の前の相手の特徴、得意、不得意を知り、力を引き出すことは、障がい者のサッカーということではなく、そもそも指導の本質であると言えます。つまり、通常の指導の精神と変わることはない、ということです。

指導上の、少しの配慮で、はるかに取り組みやすくなることがあります。

「見事な説明」を！

情報の取得や処理の面で困難がある場合、より理解しやすい説明が必要となります。簡潔で明確な説明、必要にして十分な量、適切な順番、適切なタイミングでの説明をすること。イングランドサッカー協会の障がい者サッカー指導の講習会で「『見事な説明』をすること！」と言われました。

実はこれは、日頃から誰にとっても大事なことですね。必要にして十分な明快な説明を、指導現場で常に目指しましょう！

説明が見える、わかるように

聴覚に障がいがある場合、説明から情報を得るために、説明者が話していることがわかることが大事です。その必要がある場合、特にそのプレーヤーに自分の顔、口元がはっきり見えるような立ち位置（逆光にならない）、話し方（口をはっきり動かす）、簡潔な明快な説明を心がけましょう。手話を使いこなすハードルが高くても、いくつかシンプルなサインを決めてクラブの皆で共有する方法もあります。プレーを止める時は気づいた人から皆で手を挙げて止まる等です。

疲れやすい、集中が続きにくい

体力面や集中力の持続の面から、相対的に疲れやすかったり、集中が続きにくかったりする場合があります。例えばアンプティ（切断障がい）のプレーヤーは、体表面積の影響で体温調整がしにくい面があります。あるいは、より一つの感覚や体の部位にかかる負担が大きくなる場合もあります。

通常より疲れやすいことを念頭に、プレーヤーをよく観察し、早めに、長めに休憩をとるようにしましょう。

事例

イングランドサッカー協会は、障がい者サッカーへの取り組みの面で随一の先進国です。

JFAの障がい者サッカー指導のリフレッシュ研修は、イングランドサッカー協会から学んだことをベースに構築されています。参加する一人ひとりがサッカーを楽しめるように、トレーニングに漸進性を生み出し、すべてのプレーヤーが、能力に応じて練習に参加できるようにするための考え方を の４つに分けて整理しています。その上で、トレーニングの内容を調整する考え方を「STEPSの原則」として挙げています。

1 オープンサッカー

適応や修正なく全員が同じことを行う

2 修正サッカー

同じ課題であるが、ルール、エリア、用具を変更

3 パラレルサッカー

全員がゲームに参加するが、アビリティのグループによって、別の方法やレベルで行う

4 障がい者サッカー

特定の障がいグループのための競技サッカー

STEPSの原則

- **S**pace：スペース
- **T**ask：課題
- **E**quipment：用具
- **P**eople：人数
- **S**peed：スピードを変えていくこと

障がい者サッカー指導リフレッシュ研修では、こういった考え方を学びます。
でも実は、どんな指導でも必要な考え方ですね。

「インテグリティ」の教え

イングランドFA講習会で学んだことの中で、非常に重要であったのが「インテグリティ」の教えです。つまり一人ひとりの尊厳を大切にするということです。一緒に楽しむはずが、おにごっこで誰も追いかけてこない。完全にお膳立てされて最後のパスだけそっと渡される。これではまったく楽しくないし、成長することもできない。誰も悪気はなく「良かれと思って」…。このことに気づくことはとても重要なことでした。

色の区別がつきにくい

人間の目には赤、緑、青の色を感じる細胞があり、この働きによってあらゆる色を見分けています。この色を感じる細胞がうまく働かない場合、色を見分けることが難しくなります。これを「色弱」「色覚異常」と呼んでいます。日本人で色弱の人は、男性で約20人に１人、女性で約500人に１人いると言われています。この数は決して少なくなく、チームの中にいることが十分に考えられます。

サッカーをしようと思った時には、トレーニングでは、ビブスの色の見分けがつきにくい、コーンやマーカーの色の区別がつきにくい、ホワイトボード等に書かれたチームの図等の見分けがつきにくいといった難しさがあります。試合では、ユニフォームの見分けがつきにくい、GKとFPとの見

分けがつきにくい等といった難しさがあります。 そのようなプレーヤーがいる場合、見分けやすい用具を使う、見分けやすい組み合わせで使う等といった工夫をすることで解決することができます。

プレーヤーは、このことを意識していない、あるいは遠慮して言わない、言いたくない、ということもあるかもしれません。まずは、見分けやすいか聞くこと、ビブスのコントラストや場合によっては無地と縞等、わかりやすい組み合わせをするよう配慮すること。ラインは白か黄色優先。トレーニングや戦術の説明の際のマグネットの色に配慮する。図を書く場合は、色だけでなく形でチーム分けがわかるようにする、といった配慮の方法もあります。

何が得意で何が苦手か

何は得意、何は問題なくできるが、何が苦手か。障がいの種類や個人によって異なります。問題ないことまで勝手に削いでしまうのは間違いです。勉強したり情報を得る努力はした上で、決めつけず、本人に確認しましょう。

個々のプレーヤーが、何ができ、何が得意で何が苦手か、それを把握した上で一人ひとりに向き合うことは、サッカーの指導の本質にほかなりません。

ウォーミングアップの種目の選択で少し配慮する。聴覚障がい者がいたら音の合図ではなく目で見て判断する合図にする。競争の使い方に気をつける。こういった簡単にできる工夫がたくさんあります。

腫れ物扱い、特別扱いはされたくない

一緒に楽しもうと思っていても、「よかれと思って」対応を誤ってしまうということがあります。プレーヤー達は、「腫れ物扱い」をされたくない、「特別扱い」をされたくない、と思うことがあります。参加を断られるかもしれない、だから参加をためらう人、あるいは配慮のニーズを伝えたくない人がいます。このことを理解しておくことが重要であり、注意が必要です。ルールや課題等を工夫し、皆がしっかりと参加し、全力を出せるようにすることが大事です。

サッカーを学ぶ動機や求めるものは程度の差はあれど、サッカーをしに来た人には、サッカーをしっかりと楽しんでもらい、その人なりの歩み、学びを目指したい。 本人と確認した上で、そのことに向き合っていくことが大事だと考えます。

言いたくない人もいる、情報をどこまで共有するのが良いかは、ケースによって異なるので、ここで絶対のガイドラインをお示しすることはしません。本人と話し、スタッフとも話し合ってみてください。

障がい者サッカー指導の講習会を開設しています。ぜひ受講してください！

事 例

実際に、障がいのあるプレーヤーを受け入れているクラブからの声

障がいのあるプレーヤーにとって良かったと思うこと

- 健常者のプレーヤーと触れ合うことでかなり強い刺激になっている。
- プレーヤーがまだまだ向上しようと思えるようになった。
- 健常者とのコミュニケーションは円滑にとれる（健常者が会話をリードしてくれる）。
- 冗談を言ったり、自分のプライベートの話をすることで自然と会話の中心になっている。
- 表情が豊かになる。

健常者のプレーヤーにとって良かったと思うこと

- 自分（健常者）と何も変わらないことを知った（差別的な発言や行動は特になく、知的障がいだと知って驚いていた）。
- 障がい者のプレーヤーが自分なりのルーティンをつくって取り組んでいることを知ると、健常者のプレーヤーは、より意識高く行動すべきことに自然と気づく。
- 知的障がい者チームと交流して、ピッチ内で怯えているプレーヤーがいた時に温かく見守ってそのプレーヤーがボールを触れるような行動も見られた（サッカー仲間としてどんなプレーヤーでも受け入れることができた）。
- 知的障がいのプレーヤーが日本代表や世界大会を目指していることを知って、意識が変わった。

指導者として思うこと

- 障がいのある子どもとない子どもが共に教育を受けるインクルーシブ教育は、人の価値観を広げてくれる。
- 心に余裕ができることでサッカー以外のことに目が向けられるようになり、プレーにも良い影響が見られた。
- 基本的には身体で覚えることで理解していくため、言動で理解させようとしても基本的には入らないので、子ども達と一緒に行動を共にすることを繰り返すことで、スポーツの場面だけであれば高学年になるまではあまり大差なく覚えられるし、楽しめて取り組んでいる子ども達が多く見られる。
- 「障がい」としてみるのか、「個性」として受け止めるのかは、子ども達の中には線引きが基本的にはないので、大人が決めてしまう前に、子ども達の中での対応を注意深く見ながらサポートだけして行けたら、基本的には共有できる世界が非常に大きいと思う。
- 機能障がいに関してはサポートも必要になるが、仮に手が曲がっている、欠損しているとしても、他の部分では差がないこと等だけを理解できれば特に問題がない。ただ、このことがどんな場面でも作用することが大きいため、皆で気づくことをサポートし、それほど困ることではなくなるんだという理解をしっかりつなぐことができれば、健常児と一緒に活動は可能だと思う。
- 特に小学校年代では健常児の子ども達の気づきの部分としても、障がいのある子ども達から学ぶことが非常に大きい。

JFA グラスルーツ推進 賛同パートナー

既に取り組んでいるクラブのたくさんの事例があります。
JFA.jp「JFA グラスルーツ推進・賛同パートナー」の情報をぜひご参照ください！
http://www.jfa.jp/grass_roots/partner/join/

みる

なんてったって、試合をスタジアムで観るのは最高！
観て楽しみたい、スタジアムでサッカーを感じたい。
その気持ちは皆一緒！

皆の声と共にスタジアムは変わる

JFAではSDGs研修を行っています。第2回として、SDGsが目指す社会「誰一人取り残さない世界の実現」をテーマに実施しました。障がいのある人がスタジアムで試合を楽しみたい、その場面で起こる様々な課題について考えました。

大掛かりな施設の改修は難しくても、工夫できることはたくさんあり、まず知ること、考えることが大切であることを認識できた研修会となりました。

弱視の場合

● チケットの購入に際しては、アクセシビリティ（読み上げ機能、拡大等）が整っていないため、単独での購入は難しい。
● 駅からスタジアムまでの移動は、単独では安心して移動できない。
ルート確保がされていると、安心して移動できる。
● スタジアム内でのアクセスについては、チケット番号や席番号が見えにくいため、入り口から席に移動するまでが大変（ゲート番号が見えない、階段の段差がわからない等）。音声ガイドがないので、試合の状況がわかりにくい。
スタジアム観戦者対応の実況サービスがあると、初心者やルールが分からない人へのサービスにもなってよいのではないか。
● トイレや売店の利用が難しい。
サポーター仲間にチケット購入を依頼して、スタジアム内外でのガイド同行を友人にお願いしていた。試合中は友人が耳元で試合の実況をすることで状況を理解して楽しんでいた。

聴覚障がいの場合

● アナウンスがわからない、スタッフや売店から声をかけられた時に話の内容を理解することが難しい。
筆談でコミュニケーションをとることができた嬉しい経験があった。

研修を終えて

● 仕事に向かう全般的な姿勢として、様々な人の立場や状況を理解し取り組まなければならないことを強く感じた。
● 障がいのある方がいかに来場しやすく、かつスタジアムで楽しんで頂けるのか、運営に携わる者全員がそういった視点を持つことが大事だと感じた。
● 恥ずかしながら、何を考える上でも障がい者起点が欠けていた部分があった。それは意図して無視をしていたのではなく、知らないが故に、その考えをそもそも持っていなかったと気づくことができた。
● 健常者のみならず障がいのあるサッカーファンの方に対しても満足のいく「誰一人取り残さない」のアイデアで運営に努める必要があると感じた。
● サポートスタッフを配置する。
● エレベーター利用の最短ルートマップを作成する。
● チケットの購入に障壁を感じる方向けの窓口を別途設定する等

このようなスタジアム内外での工夫が一個人ではなく、サッカー界で持続可能な形で広がることを願っています。

事例❶

川崎フロンターレ　発達障がい児向けサッカー×ユニバーサルツーリズム

発達障がいは、見た目にわかりにくく、社会認知度が高くないことから、本人と家族が日常において周囲から色眼鏡で見られたり、しつけがなっていないと言われたりすることで、外出や旅行をためらうケースが多くあるようです。また、発達障がい児には、特性から感覚過敏のケースも多く、人混み等が外出等への障壁となって、スポーツ観戦に関しても楽しむ前にあきらめてしまう子どもが多いと言われています。川崎フロンターレでは、このような社会の偏見や誤解を払拭し、誰もがスポーツや旅行を安心して楽しめるように「飛行機に乗って、スタジアムにサッカーを観戦しに行く」という子どもの大きなチャレンジを企業/行政/サポーターと一体となって実現しました。音や光をコントロールできるセンサリールームを設置し、安心してサッカー観戦をしてもらえるようにしました。また、両チームサポーターによる横断幕の掲出やひらがな応援歌詞カードの作成等で子ども達が楽しく応援できるようにしました。大型ビジョンの選手名もひらがな表記にし、スタジアム全体での取り組みを実施することができました。

©川崎フロンターレ

センサリールームとは、明るすぎない照度と、大きな音や声等の大音量を遮る遮音が施され、人混みや周囲の視線を避けた安心できる部屋です。困りごとがない人達と同様に「観る」「楽しむ」といった思いは皆一緒であるとの考え方が前提にあります。

シャレン！ Jリーグ社会連携
Jリーグ社会連携「シャレン！」は、社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流等）に、地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校等とJリーグ・Jクラブが連携して、取り組む活動です。https://www.jleague.jp/sharen/

事例❷

マンチェスター・ユナイテッド　アクセシビリティの高いスタジアム

マンチェスターユナイテッドのオールドトラフォードスタジアムは、障がい者に配慮したアクセシビリティの高いスタジアムです。スタジアムの障がい者用シートは、車椅子ユーザーのためばかりでなく、視覚・聴覚障がい者専用のシートが設けられています。特に視覚障がい者については、試合中継を聞くことのできるオーディオガイドの貸し出しや、シートの後ろに沿った壁をつたって席まで移動できる通路、白地に黄色のラインを引いた階段等、非常に配慮のあるスタジアムです。車椅子席は数が多く、スペースも広く、介助者の方の席も確保されています。マンチェスターユナイテッドは、クラブとしてポジティブディスクリミネーション（積極的差別）のスタンスをとっています。障がい者がマンチェスターユナイテッド障がい者サポーターズアソシエーション（会費有）に登録をすることで、1/4 の価格でチケットが購入でき、スタジアムへの交通機関サービス、専用ラウンジへのアクセス、ラウンジでのスナックやドリンクの提供等が無料で行われています。

支える

サッカーをプレーするだけではなく、
様々な関わりを楽しみたい。
指導者だって、審判だって、運営だって。
様々な役割にもアクセスしたい。

障がい者サッカーの促進を考える上で、プレーをする、というだけでなく、指導者、審判、役員、観客等、サッカーの様々な場面にぜひ障がい者自身に関わる道を広げたい。 障がいのある人達が、講習会を受講してライセンスを取得して、活躍する道を、もっと広げたい。

指導者養成講習会等への受講希望があった際は、支援の希望を確認し、合理的な配慮をした上で受講を実現することを目指しています。そして、障がいのある人と講習会を一緒に受講することには、ポジティブなこともたくさんあり、そのコースで得られるものが実にたくさんあります。共に目指す、取り組む。こういった環境を広げていきましょう。

講習会受講のために

障がいのある人が講習会を受講したいと希望した際に、いくつか配慮が必要となることがあります。合理的配慮とは、障がいのある人が障がいのない人と平等に人権を享受し行使できるよう、一人ひとりの特徴や場面に応じて発生する障がい・困難さを取り除くための、個別の調整や変更のことです。インストラクターや支援員等による支援、場の確保や整備、情報保障や教材の配慮等によって、実現できることがあります。講習会受講を申し込む際に、どのような支援が必要か、事前に連絡を受け、打ち合わせをし、準備をします。

❶ 情報保障

講習会で使用・提供する情報を取得することが困難な人の場合は、方法を工夫することで、情報を保障します。教育機関でも実施されています。基本的には、講師や仲間の話し方・伝え方、理解を確認しながら進めることをベースとします。

● 資料の事前配布

通常は事前配布を行わない資料でも、障がいのある人に対しては、大きくプリントアウトして、事前に手元に渡し、講習での情報取得を支援する。

● 座席の確保

プレゼン画面、講師の口の動き、通訳等が見える位置の席、移動に困難がある場合に出入口からアクセスしやすい席を確保する。

● 手話通訳の手配

かかる経費は基本的に主催者負担。自治体の支援や、JIFFによる手話通訳費用補助制度もあるのでご活用ください。ただし、聴覚障がい者全員に手話が必要なわけではないので、確認が必要となる。

● その他の方法

サポートをする人を配置する。ノートテイク（ノートをとる支援者）あるいはPCテイク（PCでノートをとる支援者）等。手話と比較して専門的技能がなくても対応が可能となる。
また、UDトークという音声を文字に変換するアプリもあり、JFAではこれを活用している。誤認識を修正する人を配置すればより精度があがる。

❷ 実技の配慮・工夫

種目の概要やポイントの情報をあらかじめ提供し、より理解しやすくすることが助けになります。また、実技種目の選択の際、同じ趣旨でも種類を変更することで対応できます。

● 聴覚障がい者の場合、音声での合図ではなく視覚の合図に対応するような種目や観ることを強調するような種目に変更する。

事例❶

イングランドサッカー協会指導者養成

イングランドFAに、指導者養成の視察に行きました。様々な分野のインストラクターの上級の研修会に参加したところ、電動車椅子の受講者がいました。脳性麻痺で、電動車椅子サッカーの元代表、現在は電動車椅子サッカー協会の代表をしている人。こういったインストラクター研修会に重度の障がい者が参加することが日本ではほぼ見かけませんが、イングランドでは当たり前のことのようです。他の受講者も慣れた様子で全く違和感がありません。
近くの席になり、研修会が終了した際、自分のバッグを口を使ってとじようとしていたので、思わず手を貸そうとしたら、自分でできることなので助けはいらない、と言われました。別の場面では、これはできないから手伝ってほしい、と言われました。その両方がとても自然でした。慣れない、わからない自分は、どうしたらいいのだろうかとドキドキソワソワしていたのですが、自然に、本人の意思やニーズに応じて共に学べばいいのだと意識するようになった経験でした。

事例❷

車椅子での指導者資格取得

羽中田昌さんはJFA公認S級指導者、車椅子ユーザーです。東京都サッカー協会開催のC級から指導者資格取得を開始しました。
通常では、指導者講習会は、怪我や病気で一時的に実技ができない方の参加をお断りし、参加できるようになってからの受講をお願いしています。しかし、障がいのある方々の場合それでは受講できないという考え方ではなく、「指導ができる」ことを養成できれば良いという判断で、受講していただきました。
以後、指導者として活動されながら、S級に至るまで、いかに各ライセンスのレベルで指導実践を行えるか、ということで、受講をされました。ご本人も様々な工夫をし、大きな声を出すためにメガホンを使用する、動きやすいように軽い車椅子に変える等々をされ、S級まで取得しました。
インストラクター、同期の他受講者にとっても、共に研修することは非常にポジティブな経験でした。

手話通訳費用補助制度

JFAおよび47都道府県サッカー協会主催の講習会やセミナーに聴覚障がい者参加する場合、JIFFから主催者側に手話通訳費用を補助する制度です。

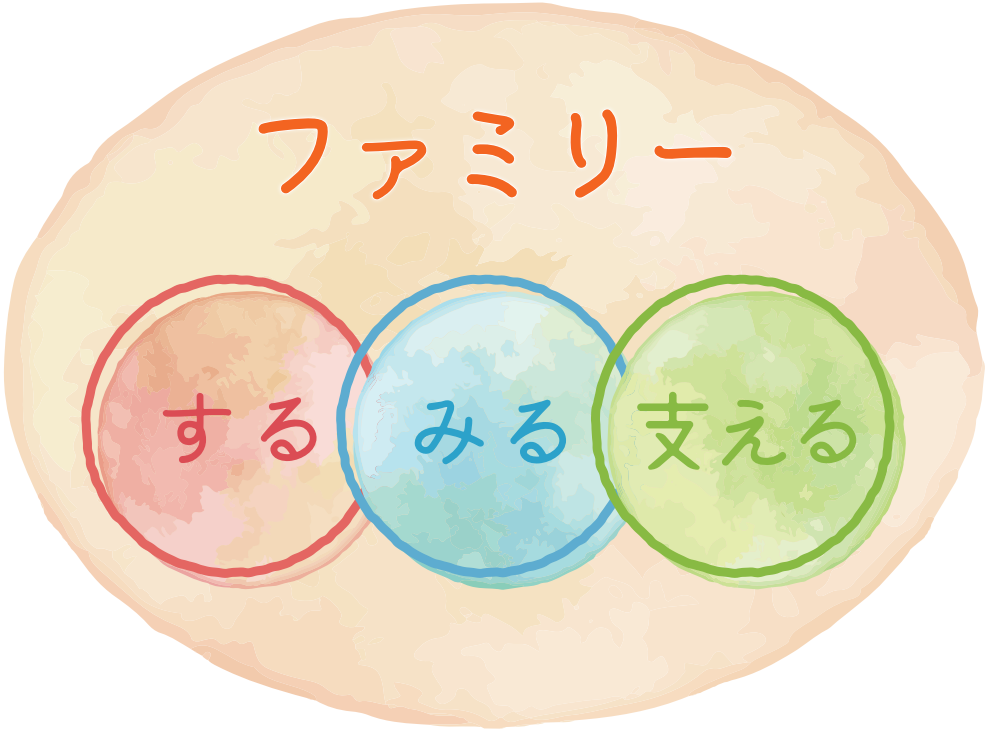
https://www.jiff.football/about/shuwa/

障がい者のスポーツ参画を応援しよう！

サッカー指導者・審判員を目指す聴覚障がい者のためにそのための寄附を募っています。

https://donation.yahoo.co.jp/detail/5176001/

「する」「みる」「支える」
どれもすべて当たり前の日常へ
私達、ファミリーのすべきこと



「サッカーをみんなのものに」していくためにも、この考え方はとても重要です。
障がいのある人のために特別に調整をする、ということよりも、
本来その方が皆のために良いこと、皆のために当たり前であることを、
丁寧にやることにほかなりません。

「『障がい』はなかった」

元サッカープレーヤー、JFA公認S級指導者の羽中田昌さんは、事故で脊髄を損傷し、車椅子ユーザーとなりました。羽中田さんが、JFAのリスペクトシンポジウムで話してくださったことです。

羽中田さんがスペインで生活をしていた時、街を歩いていると、たくさんの重たい扉があるのに、目の前の扉を、街ゆく人達が笑顔で次々と、当たり前のように、開けて押さえていてくれる。そこに「障がい」はなかった。障がいは、人がつくるものにすぎず、車椅子であっても、まったく障がいにならなかった、という経験をしたと話してくださいました。

まわりの人がそれを当たり前と思って少し工夫、配慮を自然にすれば、多くの障がいはなくなっていきます。

ユニバーサルデザインという考え方

ユニバーサルデザインという言葉、聞いたことはある、という方が多いのではないでしょうか。バリアフリーと混同されがちですが方向性が大きく異なります。バリアフリーは、障がい者・高齢者等の生活弱者のために、生活に障がいとなる物理的な障壁を削除するというもの、それに対しユニバーサルデザインは、年齢や能力、状況等に関わらず、デザインの最初からできるだけ多くの人に使いやすいものをつくるという考え方です。例えば、入口の段差にスロープをつけるのはバリアフリーの考え方、設計時点からスロープを計画し作り上げるのがユニバーサルデザインです。

バリアフリーは法律等で規制することで普及させる行政指導型ですが、ユニバーサルデザインは良いものを推奨する民間主導型です。例えば、絵文字による視覚的・直感的な情報伝達と音声や音響、触覚による情報伝達の組み合わせ等もそれに当たります。

本人自身に確認することが最優先

「障がいのあるプレーヤー」から「プレーヤーで障がいのある人」へ、捉え方を転換しましょう。大切なのはその人を知ろうとすることです。

障がいに関する知識や支援の技術を知ることは大切ですが、その知識に頼りすぎると、過度な支援になったり、支援が不足したりすることがあります。危機の回避や緊急対応等の場合を除いて、スタッフが一方的に支援の内容を判断することはせずに、本人に確認をとりながら支援を行うことが大切です。同時に、障がいのあるなしに関わらず、プレーヤー一人ひとりの性格や特徴をプレーヤー同士が知り合えるようにすることも大切です。

障がいのある人と接する機会が少なかった人は、障がいのある人とどのように接してよいかわかりにくいものです。極端なイメージを抱いてしまったり、先入観（偏見）を持たないようにするためには、その人と直接話したり、一緒に活動してみたりすることが効果的です。まず一緒に活動してみること、その中で相手と確認しながら、お互いに積み上げていくことが大切です。

主な障がいの特性と障がいのある人への配慮

障がいの種別や特性は多種多様ですが、今、目の前にいる個人に対して、
どんな配慮が必要か、どんな工夫ができるかを考えることが大切です。
障がいのある人がストレスなくサッカーを楽しめるように、
それぞれの障がいの特性を理解し、実際の状況に合わせて柔軟に対応してください。

視覚障がい

障がいの特性

全く見えない人（全盲）と見えにくい人（弱視）に分かれます。弱視は視覚障がい者全体の7～8割に当たります。弱視の場合、その人により目の状態が異なるため、相手の見え方を確認することが大切です。日本では男性の約20人に1人の割合で、赤色・緑色を見分ける細胞に異常があると言われています。

一般的な見え方

色覚異常
「色弱」や「色盲」を指す

ぼやける、にじむ
メガネ等では矯正できない

中心暗点、視野狭窄等
見える範囲が狭い

配慮すべきこと

場所の説明をするときは、「そこ」「あそこ」といった代名詞は使わず、「あなたの右側に」等と具体的に伝えるようにします。できるだけ本人の向きを中心に説明するようにします。誘導する時は、いきなり相手の体に触ったり、手を引っ張ったりせず、まず相手の方にどのように誘導すればよいか尋ねます。障がいのある人に、誘導する人の肘や肩を持ってもらい、隣や斜め前に立ってゆっくり歩くのが一般的です。
場面ごとや全体の状況について説明を加えるようにすると良いでしょう。色の識別が難しい場合は、ビブスの色分け等、見分けやすい組み合わせをします。

サポートの例

全般

- **表情がわからなかったり、名札が見えにくいため、前から近づき、「○○さん、□□です」と名乗る**
- **「10cmの段差があります」「右に90度曲がります」と具体的な声かけをして、周囲の状況を伝える**
- **声かけや指示をするときは、視覚障がいのある人を中心にして伝える ➡ クロックポジション「○時の方向に」**

する

- ボールやビブス、マーカー、ラインの色が見えにくい場合がある（弱視）
例：体育館での白や黄色のボール、色のコントラストがあると分かりやすい
➡ 対話をして、見やすい色を確認する
- 踏んでしまうことやぶつかることがある
➡ ピッチ近くにものを置かない
- 眼疾患によっては、網膜剥離等の可能性がある ➡ 指導者や周囲の選手と共有する
- 誰に声をかけているから分からないため、「○○さん、△△して」と伝える
- 初めての場所の場合、施設環境を把握する時間を設ける ➡ 施設を一周する等

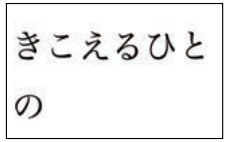
支える

- 情報提供の際には、音声読み上げや点字、拡大文字等、視覚を代替できる形で情報提供する
- 室内で講義、屋外で実技の際に、明るさや暗さに留意する ➡ 急に電気を消したりしない
- アンケート等は、印刷物だけでなく、電子データの提供や口頭での回答等の代替措置をとる
➡ テキストデータを作成して、メールで答える等に変更する

聴覚障がい

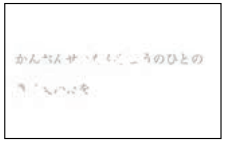
障がいの特性

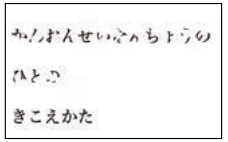
大きく分けると、生まれつき、あるいは小さい頃から聞こえない・聞こえにくい人と、病気や加齢等により、中途で聞こえない・あるいは聞こえにくくなった人がいます。主に手話を使ってコミュニケーションをとる人と、口の動きを読み取る人がいます。訓練によって音を出し話せる人もいますが、話せるからといって聞こえるわけではありません。また、補聴器を使うことで聞こえるようになるわけでもありません。



一般的な聞こえ方

伝音性難聴の聞こえ方


感音性難聴の聞こえ方



感音性難聴の聞こえ方
（補聴器使用）

配慮すべきこと

一般的に、聴覚障がいのある人は視覚から多くの情報を得ることができるので、言葉だけで活動を進行させるのではなく、ルール等がわかりやすいようにホワイトボード等も積極的に活用しましょう。手話を使わない人もいます。全員が手話を理解するわけではないということも知っておきましょう。身振り、手振りを使って伝えられることもあります。筆談に応じられるよう、携帯用のホワイトボードやメモ用紙等を用意しておくと良いでしょう。最近はスマホやタブレット端末の中に筆談ができるアプリもあります。

- 口が見えるように
- 口をはっきり大きく動かす
- 見えやすい向きに留意する
- 怒鳴らない。普通にはっきり話す
- 共通の合図を決めておくのも良い
- 身振り、手振りで伝えることも有効

サポートの例

全般
- 案内または売店で対応するときにホワイトボード・コミュニケーションボードを用意する

する
- 笛を吹く代わりに旗やビブスを振って、合図を送る。または、同じピッチにいる聞こえる選手が聴覚障がいの選手に笛が吹かれたことを教える
- 指示を出すときには、ホワイトボードやスケッチブックを使って伝える

支える
- 講習会の問い合わせ窓口には、電話だけでなくFAXやメールでの問合せ先を明記する
- 講義の際は、手話通訳、筆談（パソコンやスマホに文字を打って伝える）、音声文字変換アプリを使って情報保障をする

肢体不自由

障がいの特性

手や足等の身体の一部、または全部に障がいがあることを指します。先天性の場合、あるいは事故や病気の後遺症による後天性の場合等、症状や原因も様々です。

配慮すべきこと

会場設営の際、杖や車椅子を使っている人がいることを意識して十分なスペースを確保します。通路に通行の邪魔になるものを置かない、手すりに物をかけたりしないようにしましょう。困っている様子があれば、声をかけ、本人の意思を確認してから手助けをします。ゆっくりした動作しか取れない人もいるので、大変そうだからといって先回りせず、見守ることも大切です。

車椅子ユーザーに話しかけるときは、腰をかがめて同じ目線で話すように心がけましょう。うまく声を出せない人との会話は、なかなか聞き取りにくいこともあるかもしれませんが、わかったふりをせず、丁寧にゆっくりコミュニケーションをとってください。携帯用ホワイトボード等の活用が有効な場合もあります。介助者がついている場合でも、意思を確認する場合は必ず本人とコミュニケーションをとるようにしてください。

- 手足の麻痺や変形、拘縮等の障がいの程度は人それぞれ
- 不随運動や筋緊張等で思い通りに身体を動かせないこともある
- 車椅子や歩行器、杖等は個別にカスタマイズしている人が多い
- 使用する道具等も障がいに応じて工夫することにより参加できることが増える
- 体温調整が苦手な人が多いので、配慮が必要

サポートの例 ＜車椅子ユーザー＞

する
- 参加できるルール・環境になっているか確認する
  ➡ ボールのサイズ、手を使える等
- 車椅子が入れるピッチ、コートになっているか確認する

みる
- 車椅子、電動車椅子が使用可能なトイレやエレベーターへの案内
  ➡ 車椅子が入りづらいエレベーターの場合、荷物搬入用エレベーターの使用も検討
- 駐車場や駅から目的地までなるべく段差がないルートを確保・案内する
- 安全性に配慮しつつ、観ることを楽しめる環境を整える

支える
- 講習会会場や施設がバリアフリーになっているか
  ➡ スロープやエレベーター、多機能トイレの有無の確認
  ➡ 急に電気を消したりしない
- ドアの開閉やスロープの傾斜等移動が困難な時はサポートする

知的障がい

障がいの特性

知的障がいがある人とは、知的機能の障がい（知能を中心とした発達の遅れ）が18歳前後までに現れ、日常生活において何らかの援助を必要としている人のことを言います。知的な障がいといっても、すべての能力が劣っているというわけではありません。その人によっての特性があります。以下は代表的な特性の例です。

- 具体的なことに比べて抽象的なことを理解するのが苦手な人
- 読み書きや言葉の理解、計算の能力に制限のある人
- 作業手順を覚えたり、課題の処理に時間がかかる人
- 一度に複数の指示を出されると、指示が抜けてしまう人
- 空間的な理解や判断が苦手な人

配慮すべきこと

一人ひとりの特性を理解しながら、ルール等の説明に際して、伝え方を工夫する必要があります。

- 言語だけでなく、絵や写真等、実物のイメージがわかるものを見せて伝える
- ゆっくりと短く具体的に話す
- 答えやすいような聞き方をする
- 子ども扱いせず、実際の年齢に応じた接し方をする
- 同伴者がいる場合でも、必ず本人の意思を確認するようにする
- 話し合いのときには、他の人の意見をわかりやすい言葉に直して伝えたり、その人が発言しやすいようにする

サポートの例

全般

● 新しい環境、人に慣れるまでに時間がかかる場合がある（発達障がい、精神障がい、知的障がい）
➡ コミュニケーションに時間をかける

する

● 戦術等を言葉だけで説明して理解が難しい ➡ 分かりやすい言葉を使い、イラストや図等を用いて説明する

● 指示を理解するのに時間がかかるため、返事をゆっくり待つ

みる

● チケットの取り方のサポートをする
● 座席、トイレや売店の場所の案内のサポートをする
● 同伴者と隣同士の座席の方が安心できる

支える

● 情報提供の際に、漢字を少なくしたり、漢字にルビを振る等してわかりやすいものを用意する

● わからない時に、意思表示をしやすいカードや合図を同伴者から確認する
➡ 指導者は気長に返事を待つ姿勢で

発達障がい（自閉症や注意欠陥多動性障がい等）

障がいの特性

2005年に施行された発達障害者支援法において、初めて「発達障がい」が日本の法律の中に定義されました。同法によると、発達障がいとは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」とされています。文部科学省が2012年に行った調査で、全国の公立小中学校の通常学級に発達障がいのある児童・生徒が6.5％在籍している可能性があるという結果を公表しています。発達障がいは、一人ひとり特性が異なるため、このように配慮すれば良いということを単純に挙げることはできませんが、以下、知っておくと良いと思われる代表的な特性を挙げてみます。

- 重度の自閉症の人の場合、知的な障がいを併せ持っている人が少なくない。また、他者とのコミュニケーションが難しい場合がある。
- 高機能自閉症の人のように、知的な障がいがなく高い知能を持つ人もいるが、やはり他者との言葉によるコミュニケーションが難しい人が多いと言われている。
- 場の雰囲気を理解することが苦手な人が多い。
- 感覚過敏を伴っている人もおり、例えば、大きな物音にびっくりして、パニックを起こしてしまったり、何かにちょっとぶつかっただけで、強い痛みを感じて動けなくなってしまう人もいる。
- 予定変更をすることが苦手な人もいる。

配慮すべきこと

説明をする際、言葉はできるだけ具体的に、絵や写真等を使ってわかりやすくする工夫が有効な場合があります。短く具体的に、肯定的な言葉で話してみましょう。

例：もう少し→あと5分　あそこ→黄色い柱のところ　～してはダメ→～するようにしましょう

サポートの例

全般

● 参加できる仲間との関係が良好であるかの確認する

● 仲間からのからかいの対象になることがあるので、よく観察することが必要

● 新しい環境、人に慣れるまでに時間がかかる場合がある（発達障がい、精神障がい、知的障がい）
➡ コミュニケーションに時間をかける

する

● 大勢の仲間と同じ練習をするのが難しい場合、落ち着ける場所や人等で個別や小集団で対応し、徐々に皆と一緒にトレーニングができるようにする

みる

● チケットの取り方をサポートする
● 同伴者と隣同士の座席の方が安心できる

支える

● 注意散漫になるため、不必要な物品等は目につかないようにする

● 本人をよく知る家族や専門家に相談し、安心する仕草やもの等を確認する

● 周囲の雑音が気になる場合、イヤーマフ（耳全体を覆うタイプの防音保護具）を着用することを認める

©JAFA

©JFFID

©JCPFA

©JBFA/H.Wanibe

©JSFA

©JDFA

障がい者サッカーを楽しむ仲間達

サッカーならどんな障害も超えられる

©日本電動車椅子サッカー協会

JFAと障がい者サッカー団体をつなぐ、中間支援組織

00 日本障がい者サッカー連盟

スタッフ・関わる人の声

©JIFF

山本 康太さん 一般社団法人日本障がい者サッカー連盟 事務総長

❶ 関わるようになったきっかけ

学生時代(2005年)にサッカー日本代表のスタジアムゴール裏でのサポーター活動をきっかけに、障がい者サッカーの存在を知りました。電動車椅子サッカー、ブラインドサッカー等の大会運営ボランティア、日本代表サポーターとして携わりはじめ、2013年に日本ブラインドサッカー協会へ入職。事業戦略部門の統括を経て、現職。障がい者サッカー全体の普及に努めています。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

「同じものは見えないけれど、同じ想いにはなれる」。旅行好きなブラインドサッカー選手（全盲）との何気ない会話の中で「見えないのに旅行に行って楽しいのか？」と質問した時の答えです。伝え方ではなく、伝えようとする気持ちと行動を大事にするようになりました。

©JIFF

日本サッカー協会

JFAに加盟（関連団体）　連携窓口

日本障がい者サッカー連盟

意見集約　サポート

7つの障がい者サッカー団体

【連盟概要】
JIFFは公益財団法人日本サッカー協会（JFA）の「関連団体」です。
JFAと協働し、ビジョンの実現と7つの障がい者サッカー団体の強化・普及を促進していきます。

【理念】
広くサッカーを通じて、障がいの有無に関わらず、誰もがスポーツの価値を享受し、一人ひとりの個性が尊重される活力ある共生社会の創造に貢献する

【ビジョン】
❶ 障がい者サッカーの普及に努め、社会に根付いたものとなることで、誰もが、いつでも、どこでもスポーツを楽しめる環境を創りあげる
❷ 障がい者サッカーの強化に努め、日本代表が世界で活躍することで、人々に勇気と希望と感動を与える
❸ 健全な組織の構築に努め、社会的責任を果たしていくことで、障がい者サッカーの価値を向上する

【機能・役割】
❶ JFAとの連携窓口
❷ 各団体の意見取りまとめ・調整
❸ 障がい者サッカー・スポーツの発展に向けた施策の企画・立案・実施
❹ 各団体の連携強化に向けた取り組みの実施

【活動概要】
「7つの障がい者サッカー団体の支援」
「共生社会の実現に向けた事業」

一般社団法人 日本障がい者サッカー連盟　**https://www.jiff.football**

01 アンプティサッカー

上肢または下肢の切断障がいのある人のサッカー

プレーヤーの声

©JAFA

古城 暁博さん AC MILAN BBee千葉（千葉県）

❶ サッカーとの出会い

幼い頃に交通事故で片足を失ってしまいましたが、昔から身体を動かすことが大好きでした。小学校3年生の時に友人の誘いでサッカーを始め、義足をつけてのプレーでしたが色々と考えながらプレーをするのが愉しかったのを覚えています。その後いろいろなスポーツと出会い、陸上ではシドニーパラ五輪に出場し100mで8位に入賞もしましたが、サッカーへの想いは忘れることができず、ある時、義肢装具士さんを通じてアンプティサッカーと出会い、小さい頃の記憶や想いが蘇り、アンプティサッカーの魅力の虜になりました。

❷ サッカーへの想い

2018年のメキシコワールドカップでは日本代表の主将として出場し、開催国であるメキシコ代表と大歓声の中で試合をしたことは生涯忘れられません。あのような環境でもう一度プレーをしたいと思うことと、多くの選手に同じような経験をしてもらいたいと思っています。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

世界と戦うことを通じて、いろいろな側面を見ることができました。競技の充実だけではなく、競技を盛り上げる魅せ方や情報発信についても障がい者サッカーにはまだまだできることがたくさんあると思います。

スタッフ・関わる人の声

©JAFA

宮本　彩さん 特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会 事務局

❶ 関わるようになったきっかけ

私が関わるようになったのは、競技者の方から「自分達のパフォーマンスを評価する協力をしてほしい」と依頼を受けたことがきっかけです。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

近年、科学的な測定と評価をもとにトレーニングや指導が進められていますが、アンプティサッカーにおいては国内外ともにデータが少ない状況でした。「一緒に競技の発展に取り組んでほしい」という情熱と、迫力あるプレーの虜となり、私もお力添えしたいと、科学的なアプローチとともに、協会運営に携わらせていただいています。競技に深く関わっていくほどに、競技者と共に私自身も挑戦し、成長したいという想いを強くしています。固定概念に捉われず、新たな価値を創造し、スポーツの可能性を広げる力がこの競技にはあると確信しています。これからも、選手一人ひとりの可能性と世界への挑戦を、ファミリー一丸となって推し進めていきたいと考えています。

特定非営利活動法人 日本アンプティサッカー協会　**http://j-afa.jp**

02 CPサッカー

比較的軽度の脳性麻痺選手のために考案された7人制サッカー

プレーヤーの声

©JCPFA

二宮 一太さん ESPERANZA（神奈川県）／強化指定選手

❶ サッカーとの出会い

小学1年生の時、サッカーの試合を見て、自分もやってみたい！と思い、その時通っていた小学校の部活に入りました。僕は、交通事故で、四肢に麻痺があったので、その後、僕と同じような障がいのある人達がやっているサッカーを知り、そこで、ゴールキーパーとして、CPサッカーを始めました。

❷ サッカーへの想い

サッカーは、僕の生活で大きな割合を占めています。もっと上手くなるために、時間があれば、練習をしています。サッカーの試合となると、負けたくないし、チームのために、自分のために、1試合1試合後悔しないように自分なりに良い準備をして臨みたいからです。この先もずっとサッカーを続けられるよう、体を大切にしていきたいと思っています。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

広いグラウンドで、もっと頻繁に練習ができたらいいなと思います。皆怪我が多いので、医療スタッフがいたり、医療品が充実していると安心できます。

スタッフ・関わる人の声

©JCPFA

内山 智之さん 日本代表チームトレーナー／強化スタッフ

❶ 関わるようになったきっかけ

健常者と障がいのある方達とが一緒にサッカーを楽しむイベントの救護スタッフを務めたのがきっかけです。 それまでは障がい者スポーツというものに触れたことがなかったため、手探りでサポート方法を模索していく状況でしたが、様々な縁が広がり、今では日本代表チームのトレーナーを務めさせて頂くようになりました。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

CPサッカーに関わってまず感じたことは、サッカーにかける情熱、練習に取り組む姿勢は健常者と何も変わらない、むしろ、困難に立ち向かう姿勢は健常者以上の熱量があるということでした。脳性麻痺は、体を動かすということに対して制限がかかるため、スポーツにおいて非常に大きな不便を強いられます。しかし、CPサッカーの選手達は、そういった状況に対して不平不満を言うことなく、お互いに励まし、高め合い、また、時に競い合うという、「アスリート」としてあるべき姿を常に見せてくれます。選手達が最高の状態で試合を迎えられるよう、これからも全力でサポートをしていきたいと思います。

一般社団法人 日本CPサッカー協会　**http://jcpfa.jp**

精神疾患・精神障がいのある人を対象としたのサッカー

03 ソーシャルフットボール

プレーヤーの声

©JSFA

松嵜 俊太郎さん Espacio（千葉県）
リアル マングリーズ（埼玉県）

❶ サッカーとの出会い

私が家に引きこもっている時に、両親に無理矢理病院に連れて行かれました。その病院のデイケアプログラムにソーシャルフットボールがあったのが出会いでした。

❷ サッカーへの想い

ソーシャルフットボールを始めてから、病状で苦手だった対人関係や電車等の公共の人が多い場所に行くことができるようになりました。引きこもっていて、孤独でしたがチームという居場所を得ることができました。ですので、ソーシャルフットボールがもっと認知されて、この活動で救われる人が一人でも増えることを願っています。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

ソーシャルフットボールの選手は気分障がい、統合失調症、発達障がい、物質依存等障がいの種類は様々です。私自身も、それぞれの障がいの特徴やそれに伴う不便を全て理解できているわけではありません。ですが、健常者と少し違っていても「そういうこともあるんだな」という多様性を認めてもらえるような環境でフットボールがしたいです。そのような社会になることを望みます。

スタッフ・関わる人の声

©JSFA

奥田 亘さん ソーシャルフットボール日本代表監督

❶ 関わるようになったきっかけ

私がソーシャルフットボールに関わったきっかけは、（福）精神障害者社会復帰促進協会が主管するフットサル交流事業にて講師として依頼されたことが始まりです。当時の私は精神疾患を患っている方達と交流する機会も少なく、実際に触れ合うまでは講習会を成功できるか不安だったことを覚えています。ところが、いざ始まってみるととても前向きにフットサルに取り組む姿を見て、楽しい時間を過ごすと共に、私自身も興味を持ちました。この時にソーシャルフットボールの現状や活動内容を聞き、何か力になれることはないかと思案していた折に代表監督を打診していただきました。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

精一杯スポーツに取り組む姿からは障がいの有無は関係ないと感じさせられます。熱い想い、体を投げ打って１プレーにこだわる姿にはアスリートとしてたくさんの魅力に溢れています。多くの刺激と希望を与えてくれるこのスポーツの素晴らしさを、一人でも多くの方達と共有できる機会をつくっていきたいと、私自身日々活力をいただいています。

特定非営利活動法人日本ソーシャルフットボール協会　**https://jsfa-official.jp**

知的障がい者がプレーするサッカー

04 知的障がい者サッカー

プレーヤーの声

©JFFID

結城 隆さん 王子ジャッキーズ、東京FID選抜（東京都）

❶ サッカーとの出会い

小学校３年生の時、昼休みに友達とサッカーを始めたのがきっかけです。その後、小学校のサッカークラブに入りました。

❷ サッカーへの想い

サッカーは自分を表現できる場です。サッカーならば自分の力を思いっきり発揮できます。相手と本気で勝負できます。勉強や対人関係など苦手なことが多かったので自分に自信が持てずにいましたがサッカーのおかげで少しずついろいろなことにチャレンジできるようになりました。サッカーが人生を変えてくれたと思います。もっともっとうまくなりたいです。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

Jクラブの、どのチームにも知的障がい者サッカーチームができてほしい。サッカーが大好きな知的に障がいがある子ども達が、Jリーグのチームで同じユニフォームを着てサッカーができたら、もっともっと知的障がい者サッカーが盛り上がると思います。そうすれば日本代表チームも強くなって世界と互角に戦えるようになると思います。もっと多くの人に知的障がい者サッカーを知ってほしいです。

スタッフ・関わる人の声

©JFFID

西 眞一さん 知的障がい者サッカー日本代表監督

❶ 関わるようになったきっかけ

「私の知的障がいのある親族に、サッカーができる場所を作ってほしい。」今から10年ほど前のことです。その人は、突然私の職場に来ました。もちろん、初対面。その日から、私と知的障がいのある人とのサッカーが始まりました。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

出身である鹿児島から九州、全国、そして世界へと選手と共に戦う場所がありました。選手は、ひたむきにボールを追いかけ、奪い、ゴールを目指します。勝ったら、皆で大喜びして笑顔。負けたら、怒ったり、悔しがって涙を流す選手もいます。もちろん、芝生の上でボールを蹴って楽しくて笑顔になる選手もいます。何事にも一生懸命に取り組み、喜怒哀楽があります。また、私は、いつも選手の近くにいて同じ空気の中にいたいと思っていますが、時には遠くから眺めることもあります。それは、選手の表情、仕草、声、マインド、そして雰囲気を感じたいから。個性を理解しそれに応じた関わりにより、選手の潜在する能力が引き出され、成功体験を積み重ねるごとに自信を持ち、プレーが身についていくことが多くあります。

特定非営利活動法人 日本知的障がい者サッカー連盟　**http://jffid.com**

05 電動車椅子サッカー

電動車椅子の前にフットガードを取り付けて行うサッカー

プレーヤーの声

©日本電動車椅子サッカー協会

内海 恭平さん　レッドイーグルス兵庫（兵庫県）

❶ サッカーとの出会い

私と電動車椅子サッカーとの出会いは、養護学校在学中（12歳）に授業で体験し、先輩にチームへ誘われたのがきっかけです。競技を18年間続けていますが、2年間サッカーから離れていました。しかし、離れている期間もそれまでサッカーを通じて知り合った仲間との交流や試合観戦を続けていました。「また、サッカーをやりたい」と気持ちが芽生え選手に復帰しました。

❷ サッカーへの想い

電動車椅子サッカーは、日本ではまだまだ知名度が低いスポーツですが、この競技の魅力をいろいろな方々に知ってもらい、もっと身近な存在として感じてもらえるスポーツなることと、そしてパラリンピックへの正式種目になるように活動をしていきたいです。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

2020年は新型コロナウイルスが世界中に広がり、チーム活動や大会等が自粛や中止となり思ったようにできませんでしたが、一日も早く収束し、また以前のように皆でサッカーが一緒にできるように願うばかりです。

スタッフ・関わる人の声

©日本電動車椅子サッカー協会

上野 寿子さん　日本電動車椅子サッカー協会 医学・学術委員事務局、APOカップ メディカル・コンディショニングスタッフ、バレッツスタッフ

❶ 関わるようになったきっかけ

職場で担当させていただいていたお子さんが電動車椅子サッカーを始め、その子に一緒にやらないかと誘われたのがきっかけです。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

普段所属しているチーム以外に日本代表チームにもスタッフとして関わりました。日本代表に選ばれる選手のほとんどは自分の状態を細かく把握し、それを関わる介助者・スタッフに伝える技術を持っているのを知ることができました。姿勢一つにしてもミリ単位で修正を依頼し、慣れないスタッフにも妥協することなく伝えることで、常にベストパフォーマンスを出せるようにしています。また、渡航時の大変さも知ることができました。呼吸器を使用している選手・そうではない選手も含めて呼吸状態を確認する必要性、離着陸時の姿勢保持の難しさを痛感しました。さらに感じたことは、必要な人材が少なく、必要な人材を集めるだけの資金が足りないことです。2019年のAPOカップでは予算上6人しかスタッフはおらず、監督・ドクター以外は総務・道具の準備などの雑務を兼務しながらやらなくてはいけませんでした。

一般社団法人 日本電動車椅子サッカー協会　**http://www.web-jpfa.jp/**

06 ブラインドサッカー

ブラインドサッカーとロービジョンフットサルがあります

プレーヤーの声：ブラインドサッカー（全盲クラス：B1）

菊島 宙さん　埼玉T.Wings（埼玉県）

❶ サッカーとの出会い

©JBFA/H.Wanibe

サッカーと出会ったきっかけは、父が社会人サッカーをやっていたため、週末になると一緒にグラウンドに行くことが多く、それがきっかけとなりました。生まれつき視覚障がいがある私は、入団したチームや先輩達の支え等もあり、サッカーをプレーすることができました。例えば、試合球を私が見やすい色に配慮してくれました。

❷ サッカーへの想い

中学生になり入ったクラブチームではパスサッカーになり、見えづらい視力のせいでミスをした際、チーム内で責められることが続き、サッカーを諦めました。小学5年からブラインドサッカーを始めていたこともあり、中学1年の秋からブラインドサッカー一本にしました。サッカーは続けられませんでしたが、ブラインドサッカーがあることで今の私が表現できる場所があります。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

女子のブラインドサッカー選手は世界的に少なく、パラリンピックの正式種目になっていません。そこで、私は女子ブラインドサッカー選手を増やしていくための活動をしていきたいと思います。一人でも多くの方にこの現実を知っていただき、応援してもらえたら嬉しいです。

プレーヤーの声：ロービジョンフットサル（弱視クラスB2/3）

岩田 朋之さん　CA SOLUA 葛飾（東京都）

❶ サッカーとの出会い

レーベル病により26歳で急激に視力が低下しました。サポーター仲間からブラインドサッカー観戦を勧められ、同時開催していたロービジョンフットサルに出会いました。弱視の選手がボールを蹴る姿は、今まで地域で親しんでいたサッカーと似ていて、「ロービジョンフットサルを続ければ、また友人と一緒にボールが蹴れるかもしれない」と感じました。

❷ サッカーへの想い

サッカーを通じて、自らの見え方に対する可能性を信じ、最大限に力を発揮する方法を考え続けてきました。視覚情報を声で補い合い、自分の考えを積極的に伝えた経験が、自身や仲間の理解

©JBFA

につながり、生活に活かされています。世界選手権は希望です。海外の仲間と称えあい、励まし合ったことで、生きることへの活力を得ました。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

ロービジョンフットサルは、見えにくいままにサッカーを楽しめる方法を教えてくれます。また、この楽しむ姿を知ってもらうことで、地域とのつながりができ、混ざり合ってサッカーを楽しむようにもなりました。この競技が、多くの学校や全国に広まり、弱視の子ども達がスポーツを諦めず、楽しみ、地域の仲間をつくってほしいです。

スタッフ・関わる人の声

©JBFA

松尾 雄大さん　NPO法人日本ブラインドサッカー協会 事業戦略部 法人営業チーム

❶ 関わるようになったきっかけ

ブラインドサッカーとの出会いの地は、西アフリカにあるセネガルです。それまで障がい者サッカーを知らず、ましてやブラインドサッカーという言葉すら聞いたことがありませんでした。そんな私がブラインドサッカーに関わるようになったきっかけ、それは現地のブラインドサッカー選手との出会いです。現地で偶然ブラインドサッカーのイベント（デモ試合、体験会）を開催する機会があり、初めてサッカーをする視覚障がい者に出会いました。その時の衝撃は今でも覚えています。シャカシャカというボールの音やピッチを飛び交うチームメイトの声を頼りに、ピッチを自由に駆け回る姿、ゴールに向かう迫力、全てに圧倒されました。そして選手の姿を輝いた目で見つめる地域のサッカー少年達。この日見た光景、そして選手との関わりこそが、私がブラインドサッカーと関わり始めたスタートラインです。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

私自身サッカーの力に魅せられています。サッカーを通じれば、地域や国籍、そしてどんな障がいも超えることができると感じています。誰もが障がいの有無なく活躍できる場、そんな混ざり合う社会の実現に向けて、これからも挑戦し続けていきたいと思います。

特定非営利活動法人 日本ブラインドサッカー協会　**https://www.b-soccer.jp**

ろう者（デフ）サッカー、ろう者（デフ）フットサルがあります。

07 ろう者（デフ）サッカー

プレーヤーの声

岡田 侑也さん　KDFC（神奈川聴覚障害サッカークラブ）、神奈川県教員SC（神奈川県）

❶ サッカーとの出会い

©JDFA

私が大学時代、デフサッカーをやっていた大学の先輩からSNSを介して紹介されたことが初めてのデフサッカーというものを知るきっかけでした。そこからデフサッカーに関わることが次第に増えていきました。

❷ サッカーへの想い

デフサッカーとしての経験がまだ浅い自分はまだ一概に多くは語れません。しかし同じ境遇（聴覚障がい）の者が一致団結し一つの目標へ向かうことは、日頃健常者と一緒に過ごすことが多い私達にとって特別であり、新鮮かつ夢中になれる場所だと感じます。

❸ もっとこうだったらいいなと思うこと

皆さんはデフリンピックをご存知でしょうか。オリンピック・パラリンピック（以下、オリパラ）のように、4年に一度、聴覚障がいのある者だけで開催される国際大会です。オリパラは知っていてもデフリンピックは知らないという方がほとんどの現状ですが、この機会にぜひデフリンピックについて知っていただきたいと思います。

スタッフ・関わる人の声

©JDFA

山本 典城さん　デフフットサル女子日本代表監督

❶ 関わるようになったきっかけ

2012年当時デフフットサルを広めようと頑張っていた協会のスタッフと交流を持つことがきっかけとなり、自分も何か力になれることがあればと考えていた中で協会から監督をやってもらえないかと打診をいただきました。

❷ 関わって得られたもの、感じたこと

世界一を目指すというやりがいを得ることができ、自分の人生の中でこれまでになかった価値観を与えてくれました。障がいがあるなしに関係なく全ての人に夢や目標を持つチャンスがあり、その環境をもっともっとつくっていかないといけないこと、そのために自分達の活動をしっかりと発信し、一人でも多くの人に知ってもらうことが必要。そしてどんなカテゴリーであっても日の丸を背負うことは責任があり、覚悟が必要であり、誇りある場所だということを感じています。

一般社団法人日本ろう者サッカー協会　**http://jdfa.jp**

ひろげよう！
サッカーファミリー
次の100年へ

INFORMATION

● JFAグラスルーツ宣言（2014年5月15日）障がい者についても明記
http://www.jfa.jp/grass_roots/declaration/
● 技術委員会内に普及部会発足、グラスルーツ全般を管轄
● （一社）日本障がい者サッカー連盟（JIFF）設立、JFA加盟団体
https://www.jiff.football/
● 9地域障がい者サッカー連携会議開催、JFA.jp内で情報提供
トップページ＞する＞障がい者サッカー
http://www.jfa.jp/grass_roots/disability/
● 障がい者サッカーHAND BOOK発行
指導者養成その他会議にて配布
http://www.jfa.jp/grass_roots/pdf/disability_handbook.pdf
● JFAグラスルーツ推進・賛同パートナー
http://www.jfa.jp/grass_roots/partner/
● だれでもJoin♪ 障がい者サッカー
http://www.jfa.jp/grass_roots/partner/join/
● JFAグラスルーツ推進・賛同パートナーカンファレンス実施
● JFA指導者養成講習会にて障がい者サッカーに関する情報提供
● JFA公認指導者対象リフレッシュ研修会にて、障がい者サッカー指導をテーマとして実施（2日間）
※受講者は「JIFFインクルーシブフットボールコーチ」として認定
https://www.jiff.football/about/shidousha/
● JFA公認指導者対象リフレッシュ研修会E-ラーニングにて障がい者サッカー指導をテーマとして実施
● 障がい者サッカー指導ショートコース開講（3時間）
※受講者は「JIFF普及リーダー」として認定
https://www.jiff.football/about/shidousha/
● JFA公認指導者養成講習会受講促進
※JIFF手話通訳費用補助制度
https://www.jiff.football/about/shuwa/
● JIFF手話通訳費用補助の原資として募金制度
https://donation.yahoo.co.jp/detail/5176001/
● JFA全体でSDGsに取り組み
https://www.jfa.jp/social_action_programme/
https://www.jfa.jp/social_action_programme/football_contribution/

おわりに

「誰一人取り残さない」世界をつくること。
私達サッカーファミリーは、大好きなサッカーを通じて、このことに向き合います。
知ること、意識することからすべてが始まる。
皆さんが、障がいのある人がサッカーを楽しむために必要なこと、そうであったらいいことについて、知ること、意識すること、想像してみること、勇気をもって声をかけてみること、一歩踏み出してみることに、このハンドブックがきっかけとなれば幸いです。

これまでの100年、この国にサッカーを伝えた人、楽しみ情熱をもって続けてきた人達が、たくさん仲間を増やし、サッカーはこんなに大きく発展してきました。
次の100年に向けて、仲間をもっと増やしたい。誰一人取り残すことなく、サッカーの魅力のもとに集まった仲間を大切にしたい。
そんな100年に向けて、サッカーファミリー皆で進んでいきましょう。

イラスト：高橋 朋之
1990年生まれ、1歳半で自閉症と診断される。幼い頃より動物や生物等の図鑑に興味を持ち、それを見ながら思うがままにペンで描いていた。現在は実物を見て、細部にわたって描いている。
社会福祉法人九十九会が運営する障害福祉サービス事業「まあるい広場」（千葉市）にて活動中

発　行

公益財団法人 日本サッカー協会

編　集

公益財団法人 日本サッカー協会 指導普及部
一般社団法人 日本障がい者サッカー連盟

編集協力・写真提供

特定非営利活動法人 日本アンプティサッカー協会
一般社団法人 日本CPサッカー協会
特定非営利活動法人 日本ソーシャルフットボール協会
特定非営利活動法人 日本知的障がい者サッカー連盟
一般社団法人 日本電動車椅子サッカー協会
特定非営利活動法人 日本ブラインドサッカー協会
一般社団法人 日本ろう者サッカー協会
公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会
特定非営利活動法人 CPサッカー＆ライフエスペランサ
A-pfeile 広島

● 本紙掲載のレポート、写真、図表等の無断転載を禁じます。
● 発行日：2021 年 1 月
※掲載しているデータは 2020 年現在のものです。